病院図書室における情報検索

—CD－ROMの利用を中心として—

河合富士美

1．はじめに

10年前のオンライン文献検索の登場により、図書館員の役割は書庫の番人から情報の提供者へと大きくイメージチェンジした。これはまだまだオンライン文献検索の普及率が少ない病院図書室にとっても例外ではない。昭和63年に近畿病院図書室協議会が実施した「病院図書館員のライブラリアンシップに関するアンケート調査」[1]によると「職場では、図書室に何を一番期待していると思うか」という設問には、“資料の収集管理”という回答が約51％だったのに対し、“情報の検索・入手・提供”が約63％であった。更に「今、最も力を注いでいる仕事は何か」という設問には、レファレンスワークを挙げた人が最も多かった。今またCD-ROMの登場により我々の役割はどう変わっていくのだろうか。阪上は、情報管理の8月号においてこれからの情報担当者に求められるものとして、「多量の、エンド・ユーザが自ら行える簡単な依頼検索から開放され、それにかわり、よりユーザ指導と教育に力をそそぐことになり、そして、開発されるであろう様々なエンド・ユーザ用のシステムの使い方をマスターせねばならない。エンド・ユーザがデータベースにより親近感をもち、利用する機会が増えることになると、サーチャーの仕事はさらに情報コンサルタント的になるであろう。データベースの選択、検索戦略のアドバイスを行い、エンド・ユーザが困難だとする複雑な検索を引き受けて行くには、新しい動きに遅れることなく情報を吸収し続けねばならない。」と述べている[2]。実際、私の勤務している図書室にMEDLINE　CD-ROMが導入された時、利用者の一人から「これからは楽になりますね。」といわれたことがある。確かに、検索が利用者の手に渡ることにより、物理的な業務量は減ったのかもしれないが、ここで楽をするか、今まで以上の能力を身に付けるべく努力するかによってこれからの図書室の評価が決まっていくのだと危機感を持たざるをえない。では我々は何をどう実践していけばよいのだろうか。聖路加国際病院ではMEDLINE　CD-ROMを導入してからすでに一年以上を経過した。また、キャプテンシステムによるエンド・ユーザー・サーチも数年前から行われていた。そこで、まず当図書室におけるレファレンス・サービスの概略を述べ、CD-ROMやキャプテン・システムの利用状況を報告することでこの難問に取り組む手掛かりとしたい。

かわい　ふじみ：聖路加国際病院医学図書室

2．聖路加国際病院医学図書室における情報検索の概略

当院は341床の臨床研修指定病院で、利用対象

者数は846名、うち医師は163名である。図書室は、司書３名で運営されており、うち２名はパートタイマーである。そのため、整理業務などについては役割分担をしているが、レファレンス・ワークについては原則として依頼を受けた者、手の空いた者が対応している。利用者は大きく分けて以下の６つの方法を通じて情報を得ることができる。

ａ．オンライン文献検索

1978年からJOISを、1980年からはJOISとDIALOGの２つのシステムを利用している。ここ数年は、年200件程の利用があった。料金は原則として実費のみとし、基本料金は徴収していない。また、消費税も病院負担としている。

ｂ．ＣＤ-ＲＯＭによる文献検索

後に詳述

ｃ．冊子体二次資料

現在冊子体二次資料として購入しているのは以下の通りである。

Index Medicus(Monthly)
Cumulated Index Medicus
医学中央雑誌
International Nursing Index
日本看護関係文献集
最新看護索引
その他文献集

ｄ．参考図書

参考図書は貸出禁止にしており、参考図書コーナーにまとめて置いてある。その数はおよそ100冊程である。

ｅ．特集記事カード索引

和雑誌で特集のあるものについては、カードを作成し、医学用語シソーラス（医学中央雑誌の件名）で件名を付与しカードボックスに配列している。

ｆ．コンテンツ・サービス

予め登録のあった新着雑誌の目次のコピーを個々の利用者に届けている。料金はセルフ・サービスの場合と同じく１枚10円で、半年に１度集計し、請求している。

当室では、冊子体を使ったマニュアル検索は原則として受けていないが、クイックレファレンスについてはできるだけ引き受けるようにしており、その件数は１ヵ月80件程である。内容は記録しておらず件数のみの記録である。

４．キャプテン・システムによるエンド・ユーザ・サーチ

また、今年の６月まではキャプテン・システムを通じてＡＭＳ国内文献DATABASEによる日本語文献の検索を行っていた。これは医学中央雑誌刊行会が作成した「医中誌タイトルガイド」をＡＭＳが提供したもので、非常にユーザーフレンドリーなシステムで利用者に人気が高かった。テレビのリモコンのようなキーパッドで操作することが親近感を持たせ、低料金だったので料金を徴収しなかったことが拍車をかけた感があった。検索方法が簡単で内容的にも新しく、我々も書誌事項の確認や予備検索に使ったりと重宝していた。反面、網羅性や正確さ、スピードの点でJOISには及びもつかなく「ちょっと文献を探す時には便利だが、本格的に探すならやっぱりJOIS」という感じだった。閲覧室に設置してあったのと夜間も使えること、そもそもモニターとして設置され借物意識が強かったことなどから終に統計はとらなかった。そのサービスが６月いっぱいで終了された。母体の医中誌タイトルガイドが無くなったためである。いずれはＡＭＳはキャプテンから撤退し、パソコン通信専門になる予定だという。余談になるが確かにキャプテン・システム自体が内容が乏しく、ただならあってもいいけどお金を出してまではちょっと、という程度のものだった。さて、愛用されていただけに利用者の落胆は大きく、「どうして無くなっちゃうんですか？」という質問は当然としても「これから日本語の文献はどうやってさがせばいいんですか？」という質問が多かったことはいささかこちらが落胆させられた。そういえば皆いつのまにか医学中央雑誌をあまり使わなくなっていた。とはいえキャプテン・サービスを利用したことで利用者の中に自分でコンピュータを使って文献を探す面白さがしっかりと根づいたことは確かであった。

５．ＣＤ－ＲＯＭ　MEDLINEの利用状況

ＣＤ-ＲＯＭ　MEDLINEを導入した経緯につい

ては既に昨年の全国図書室研究会において発表しており、まとめたものが「ほすぴたるらいぶらりあん」[3]に掲載されているので詳しくはそちらを参照されたい。

当室では1989年6月にMEDLINEのＣＤ-ＲＯＭを導入した。ＣＤ-ＲＯＭ版は競合製品であり数社から販売されているが、当室ではSilver Platter社版を1966年分より利用することとした。これにより、オンライン検索で検索可能な年代全ての情報が手元に揃ったわけである。（ただし、最新の情報についてはオンラインの方が若干早いので同一というわけではない。）本格的な利用が始まった1989年7月から一年間の利用記録をもとに利用状況を分析してみた。利用記録については当初パソコンのメニュー方式による管理を予定していたが、プログラムが未だに完成しておらず、利用者に記録簿に記入してもらっている。そのため、記録漏れがかなりあり、これから示すデータは実際より控え目なものとなっていることを予めお断わりしておく。

1989年7月から1990年6月の一年間に99名が451回利用した。平均すると一人当たり5.5回利用したことになる。また、オンライン検索との比較のためＣＤが入る直前1年間（1988.7～1989.6）のオンラインMEDLINEの利用状況と対比させた（表1）。オンラインは38名が151回利用していた。ＣＤになり、利用者が2倍、利用回数は3倍に増えたことになる（図1）。更にＣＤ導入後一年間（1989.7～1990.6）のオンラインの利用状況であるが、オンラインの利用回数は66回で前年の半分以下となった（図2）。当然なぜオンラインを利用したのかという疑問を感じられるであろう。オンラインを利用した検索の半分以上（39回）は院外からの依頼検索である。ＣＤのデータは料金をとって売ることはできないので全てオンラインで処理している。他は、大変急いでいたもの、予め1966年まで検索することを前提として依頼されたものなどである。

次にＣＤの利用者の分析を行った（図3）。ＣＤの利用者は99名で、うち医師が83％、看護婦が6％、その他（その殆どは診療補助部門のスタッフである）が7％、院外が4％だった。また、利用回数による内訳では、計451回中医師が88％、看護婦が2％、その他が8％、院外が2％だった（図4）。当然のことながら医師の利用が圧倒的に多かったのだが、その中でも、20－30代の医師の利用が大半をしめていた。彼らのもう一つの特徴は自分達で検索方法をマスターしてしまったことであった。簡単な日本語のマニュアルを作成した後利用を希望する人に個々のレベルに合わせ指導していくつもりでいたところ、どんどん自分達で使い初めていた。これは予想外の成り行きではあったが、利用者の自分達の手で文献検索をした

表1　ＭＥＤＬＩＮＥ利用数

利用者の比較

ONLINE :'88.7-'89.6
CD-ROM :'89.7-'90.6

	ONLINE	CD-ROM
医　師	38名	82名
看護婦	7名	6名
その他	1名	7名
院　外	7名	4名
計	53名	99名

利用回数比較

ONLINE :'88.7-'89.6
CD-ROM :'89.7-'90.6

	ONLINE	CD-ROM
医　師	128回	397回
看護婦	10回	7回
その他	2回	38回
院　外	11回	9回
計	151回	451回

図1　MEDLINE利用状況－オンライン前年分との比較

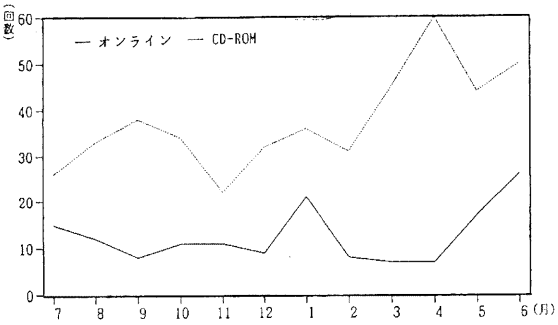


図2　MEDLINE利用状況－ＣＤ導入後

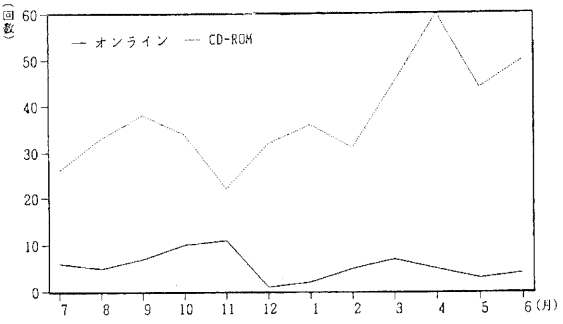


図３　利用者実数による比較

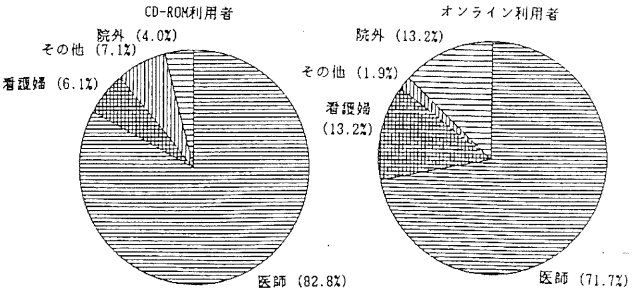
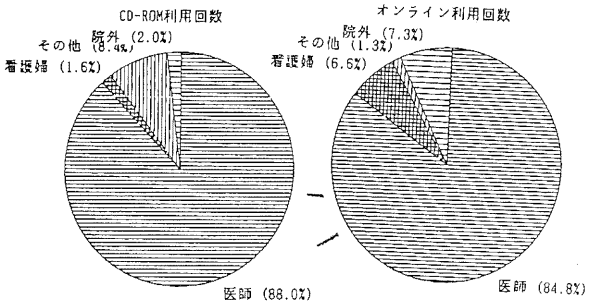


図４　利用回数による比較



い欲求の強さと、DC-ROM　MEDLINEのユーザーフレンドリーさを証明する出来事と捉えることができよう。また、医師、医療補助部門の利用が大幅に増えたのに対し、看護婦の利用は減少した。もともと文献検索の利用数が少ないのと、研究の好きな人が留学や退職でいなくなったなどの影響もあるのだが、女性は男性より機械の操作を苦手としていることの現れと捉えることもできよう。

検索１回当たりの平均利用時間は20分、平均打ち出し件数は18件であった。また、検索期間は過去２～３年が多かった。

導入後一年経ち、ＣＤの利用はまずまず定着したといえる。図書室に入ってくるなりＣＤの検索を手短に行い、書庫へ入って雑誌を抜き出し、コピーをして帰る利用者が随分目につくようになった。残念ながら、私達は取り残されていくような不安を感じ始めている。今後の大きな課題は、検索方法について利用者ともっとコミュニケーションを図り、利用者がより効率よく質の高い検索ができるようアドバイスしていく態勢を築くことである。

６．病院図書室におけるこれからの情報検索

情報化社会における図書館、図書館員の重要な役割の一つは、膨大な量の情報の中から利用者の情報要求に適合する情報を検索し、提供することである[4]。病院図書室においては診療の補助を行うことが情報提供の主要な目的となろう。設備が無くともある程度は努力で補えるが、やはりこれからはコンピュータを利用することは必須といえるだろう。オンライン文献検索は人員や料金の点から病院図書室では導入がなかなか難しかった。今後はこれを通り越してＣＤ-ＲＯＭによる文献検索を導入する所が多くなるだろうと予測される。実際今まで狭くてＩＭも無かったのだがＣＤなら場所もとらないので買うことにした、といった話をあちこちで聞く。今の所はまだまだ夢のようと思っていても噂を聞きつけて必ずや医師の側から要望が持ち上がってくるであろう。また、管理者側は利用者が自分で検索を行うなら担当者の業務量が増えたり、研修を受けさせたりしなくて済むと考えがちである。確かにＣＤ-ＲＯＭ版は検索の経験のない医師がすぐ覚えられ満足できる程簡単なシステムである。彼らは医学の専門家であり実際の必要性を抱えて検索しているのであるから医学知識に乏しく代理人である我々が出る幕はないと思われるかもしれない。当院におけるＣＤの利用傾向としては、若い医師が症例検討のため適当な文献を数件打ち出しているといえるが、こうした使い方の殆どの場合には確かに利用者自身が検索を行うことが適当かもしれない。しかし、大変珍しい症例なので学会で発表するとか、中堅以上の医師が総説や解説を書いたり、講演をするために検索をするとなると話は別である。網羅的な検索を効率良く行うにはMeSHを中心とする「MEDLINE」の構造を完全に理解し、使いこなせることが必要となる。もちろん医師の中にはこの段階まで検索技法を修得できる人もいるだろう。しかしそれを利用を希望する人全てに指導する義務も時間もおそらく無いであろう。だからこそ我々が情報検索の専門家となり、医学の専門家である利用者と協力して検索を行っていく体制が必要な

のである。もしもオンラインを経験せず、直接CDを設置する場合でもJICSTなどでMEDLINEの講習を受け、MeSHや検索技法についての基礎知識を身に付けておくことは絶対に必要であると考える。そして例え今現在環境が整っていなくとも、積極的に情報を収集し学習して備え、担当者として意見を求められた場合に、「わかりません」「知りません」という返事を返すことのないよう心掛けたい。

引用文献・参考文献

1）松本純子他　「病院図書館員のライブラリラリアンシップに関するアンケート調査」の集計結果について、病院図書室　1988；9：33−44.

2）阪上晃庸　多様化するオンライン検索システムへの対処．情報管理　1990；33（5）：435−443.

3）河合富士美　病院図書室におけるMEDLINE CD-ROMの導入．ほすぴたるらいぶらりあん　1990；14（4）：8−11.

4）津田良成編　図書館・情報学概論．勁草書房、1983：112.